100 年前にカワセミを撮った男・下村兼史
－日本最初の野鳥生態写真家－

インタビューシリーズ・第 1 弾

「下村兼史の人と作品を語る」
（後編）

ゲスト：平岡 考 氏

（公益財団法人 山階鳥類研究所・広報コミュニケーションディレクター）

《カワセミ》1922 年 1 月 5 日 佐賀県佐賀市
撮影：下村兼史　所蔵：（公財）山階鳥類研究所

FUJIFILM SQUARE

目 次

初期の傑作 ____ p.3

視覚的資料としての下村の写真 ____ p.5

ブラインドを駆使した撮影 ____ p.6

長年の謎を解明した托卵の記録 ____ p.7

国際的にも高く評価された下村の写真 ____ p.9

本プログラムについて

フジフイルム スクエアは、価値の高い写真作品を銀写真プリントで展示し、ご来館者に写真作品との出会いの場をご提供しています。また、作品への理解をさらに深めていただくために、ギャラリートークや講演会等の鑑賞サポート活動に力を入れており、2019 年度には 1 万 4 千人以上の方々にご参加いただきました。

現在は新型コロナウイルスの影響で、写真展会場で行う鑑賞サポート活動は見合わせておりますが、新たな関連プログラムとして、特別ゲストへのインタビュー記事を公式ウェブサイトにて公開してまいります。

ご来館いただき写真展をご鑑賞いただいた方にも、ご来館されておられない方にも写真の魅力を知っていただき、作品制作の背景や意図等への理解を深め、お楽しみいただける機会となれば幸いです。また、本インタビュー記事が写真文化の価値を将来に伝えていくための有益な資料となることを願っています。

ゲストの平岡 考 氏（公益財団法人 山階鳥類研究所・広報コミュニケーションディレクター）
フジフイルム スクエア 写真歴史博物館 閉館後の無観客会場でのインタビュー風景

初期の傑作

―― それでは、展示作品の中から主要なものをご紹介いただけますか。

平岡　はい。まずは《河畔の暮》です。これは 1920 年代初期に撮影されたもので、下村の初期の傑作のひとつです。

―― 他の作品とは少し雰囲気が違いますね。

平岡　今回展示している作品では主に野鳥が撮られていますが、これは飼い鳥であるシチメンチョウが被写体となっています。この作品は、下村の書いたエッセイなどには出ていないのですが、ご遺族から寄贈いただいた写真資料の中から見つかって、その後『寫眞藝術』という 1920 年代の芸術写真の専門誌のコンテストで三等一席に入賞した作品であることがわかりました。下村が当時、芸術写真にも関心を持ち、影響を受けていた証でもあります。

―― 生態写真ばかりでなく、芸術写真として評価される作品も撮影していたのですね。

平岡　『寫眞藝術』の中で、「天眞が流露している」と評されているのですが、つまり飾り気のないそのままの味わいが表れているといいますか、素朴な作風が評価されたようです。

―― 次の作品は、松に立派な白い鳥がとまっています。

《河畔の暮》
1920 年代初期　撮影地不詳（展示作品は複製）

《巣にいるコウノトリ》
1920 年代後半 兵庫県出石郡（現・兵庫県豊岡市）

平岡　《巣にいるコウノトリ》も比較的初期の重要な作品です。コウノトリというのは、最近の報道でも時々出てきますが、日本では一時、絶滅、つまり日本で繁殖する鳥はいなくなってしまい、ごく稀に、大陸から飛来することがあるだけになってしまった鳥です。現在、兵庫県などで人工的に増やして、もう一度、野生に戻そうという取り組みがなされています。

―― 下村が撮影した 1920 年代も希少な鳥だったのですか？

平岡　江戸時代には、江戸市中のお寺の屋根にも巣を作っていたそうで、もともとは日本中のあちこちにいて、ありふれた鳥だったそうです。ですが、明治維新後、猟銃の規制が緩くなり、誰でも鉄砲が撃てるようになったこと、それから戦争中には松林が伐採されたこととか、戦後には農薬の問題などもあり、いくつかの原因が重なって絶滅へ追い込まれていってしまったんですね。

―― まだよく見られた頃の写真なのですね。ずいぶん大きく見えますが、コウノトリはどのくらいの大きさですか？

平岡　つばさを広げると差し渡しが 2 メートルくらいになります。今、ソーシャルディスタンスの確保ということで、いろいろな大きな鳥がつばさを広げたイラストも最近出回っていますが（笑）そのくらいの大きさというとわかりやすいでしょうか。

―― 鳥の大きさをソーシャルディスタンスと対比するのも面白い趣向ですね（笑）

平岡　立派な鳥で、昭和初期に、この写真の撮影地でもある兵庫県豊岡市の繁殖地では、コウノトリの巣が

見えるところに茶店を作って、お金を取ってお茶を飲ませて見せる、というようなこともあったそうです。

―― コウノトリは、めでられた鳥だったのですね。

平岡　大きな鳥ですから、仲睦まじく子育てしている様子というのは、とても見応えがあります。この作品は、そういう情景を撮ったものです。

視覚的資料としての下村の写真

―― 専門的に見ると、周囲の環境が写り込んでいることにも資料的な価値があるのでしょうか。

平岡　そうですね。今あらためてコウノトリを野生に戻していくときに、昔はこういう環境だったということを知るための重要な視覚的資料にもなると思います。周囲の環境などがしっかり写っていることも、下村の写真の特徴です。

―― 現在の環境と比較できるのですね。

平岡　今は電柱の上に巣を作って感電死してしまうコウノトリもいますので、それとは別に、営巣用に、人工の「巣塔」と呼ぶものを建てたりしているのですが、この写真では、コウノトリが元々はこうして松の木に巣を作っていた様子が詳しく分かります。

―― 次の作品は《マナヅル》ですね。

平岡　鹿児島県の荒崎と呼んでいますが、熊本県に近い出水平野のツル類の越冬地で撮られたものです。ツルというと、タンチョウを思い浮かべる方も多いと思います。真っ白で、立っていると体の後ろはしと首のあたりが黒く、頭のてっぺんが赤いツルをご存知でしょう。

―― タンチョウは写真や絵で見たことがある方が多いでしょうね。

平岡　タンチョウは日本であれば北海道の東部に一年中生息していますが、マナヅルは日本だとおもに鹿児島県の出水平野に越冬に来るんです。繁殖地は、極東ロシアから中国東北地方で、冬になるときにそこから飛んでくるわけです。当時、マナヅルは数十という程度の数でしたが、その後、この出水の荒崎の田んぼで餌を与えて保護した結果、現在では三千羽以上が来るようになりました。鳥が増えてうれしいことなのですが、近年はこの出水への一極集中の緩和が、この鳥の保全上の課題になっています。

―― 1920 年代よりずっと多いのですね。この写真はどういった状況ですか。

平岡　これはマナヅルの家族です。左から 2 番目にいて頭を下げている幼鳥 1 羽と、親が 2 羽います。今は乾田化が進められていて、冬にこんな水浸しの農耕地はあまりないですけれども、昔はこういう場所があり、たくさんの生物が育まれていたはずです。

《マナヅル》（右上）と《ナベヅルの降下飛翔》（左上）
いずれも 1920 年代後半 鹿児島県荒崎

――《巣にいるコウノトリ》と同じく、環境の変化がよくわかるのですね。

平岡　水鳥のために冬でも水を張った田んぼが、作物にも生き物にも優しいということで、今また試みられたりしていますけれども、当時のこの荒崎周辺の水田はおそらく耕作が大変だったのだと思います。が、昔はこういう状況だったわけですね。こういう風景の中にマナヅルが見られたということがわかる、とても貴重な写真です。

ブラインドを駆使した撮影

―― マナヅルの写真はどのようにして撮られたのでしょうか。

平岡　これは、稲わらなどで作った固定式のブラインドの中から撮っています。ブラインドというのは、鳥を観察、撮影するための隠れ家のことです。鳥から見えないように姿を隠して、シャッターチャンスを待つためのものですね。人の気配を感じさせないので、鳥の自然な姿を撮れるのです。

―― 撮れるまでにどのくらいの時間がかかるものでしょうか。

平岡　たぶん、朝早く入ってずっと待っていたりということもあったと思います。それから、立ててから数日のあいだ、人は入らずに置いて、鳥に慣れさせてからから入る、というようなこともしていたようです。

―― 人間の気配をいかに消すかということですね。同じ出水で撮られた《ナベヅルの降下飛翔》も美しい

写真ですね。

平岡　ナベヅルはマナヅルよりもう一回り小さい鶴で、やはり出水平野が主な越冬地です。この写真では、どこか遠くから群れが飛んできて、地上に仲間の群れがいるところにスーッと降りてくるところを見事な構図でとらえています。

長年の謎を解明した托卵の記録

―― 次は、托卵（たくらん）の写真です。

平岡　托卵で一番有名なのはカッコウです。カッコウは自分では巣を作らず、例えばオオヨシキリとかホオジロという別種の鳥に自分の卵を預けて雛を育てさせます。その習性を托卵と呼ぶのです。

―― 私は下村の写真で初めて知ったのですが、衝撃を受けました。

平岡　本当にうまくできていて、例えばオオヨシキリに卵を預けたとすると、オオヨシキリの卵よりも少し早く、カッコウの卵が孵るんですね。大変残酷に聞こえるかもしれませんが、先に孵ったカッコウの雛の背中は、孵化してしばらくの間だけ、他の卵を巣の外に落とすのに適した形になっていて、育ての親の本物の卵を全部放り出してしまうのです。

―― 育ての親が自分の卵を拾って、巣の中に戻すということはないのですか？

下村が写真や映像で撮影した托卵についての一連の記録
1940–1942 年　富士山麓須走（展示プリントは複製）

平岡　鳥というのは、卵が巣の中にあればちゃんと卵と認識するんですが、転がって 10 センチでも巣から外に出てしまうと気にしなくなってしまいます。そうすると、カッコウの雛だけが生き残り、親も何とも思わずにどんどん餌を与えて、その雛だけが巣立っていくわけなんですね。

―― カッコウの他にはどんな鳥が托卵をしますか？

平岡　日本で托卵をするのはカッコウとその近縁種だけです。カッコウとホトトギス、それからツツドリ、ジュウイチの 4 種類がいます。今回展示している写真に出てくるのは、ジュウイチがコルリに托卵しているもの、それからツツドリがセンダイムシクイに托卵しているものですね。

―― 托卵の詳しい生態というのは、下村の記録によって初めてわかったのですか？

平岡　例えばカッコウはヨーロッパにも分布するのですが、ヨーロッパでも、最初は、いったん地上に卵を産んでくちばしでくわえて巣の中に入れるのではないかとか、いろいろなことが言われていました。ただ、カッコウについては 1920 年頃には、イギリスで、巣に直接産むという観察がされていたのです。しかし、ジュウイチの場合は、托卵相手のオオルリやコルリの巣が、斜面の窪みや、木の根の下の空洞の中などに作られて、上が開けていない巣であることが多いことから、卵をどうやって産み込むかはわかっていませんでした。

―― 下村はイギリスでカッコウの産卵行動が観察されていたのを知っていたのでしょうか？

《ツツドリの雛に給餌するセンダイムシクイ》（下）
1930 年 5 月 20 日 富士山麓須走

平岡　下村は、イギリスの鳥類の生態についての文献を読んで、カッコウの産卵については解明されているのを知っていました。そして、東アジアにしか分布していないジュウイチの産卵行動が未解明なのを意識していたでしょう。ジュウイチがコルリの巣にじかに卵を産み込んでいるというのは、下村の記録によって初めて確認されたわけです。快挙ともいえる仕事でした。

国際的にも高く評価された下村の写真

――《ツツドリの雛に給餌するセンダイムシクイ》も托卵に関連した作品ですね。

平岡　はい。これはガラス乾板で撮られていて、今みたいに連写できるわけではなく、1 回のチャンスで 1 回のシャッターしか切れなかったので、撮影するのは大変なことだったと思います。

―― 本当に見事です。次の作品《巣穴に飛び込むルリカケス》も傑作ですね。

平岡　ルリカケスというのは、奄美大島やその周辺の島にしかいない鳥で、鳩よりもちょっと小さい綺麗な鳥です。頭と尾などが瑠璃色で、背や腹にかけては栗色というか赤褐色の、豪華な感じの立派な鳥です。その繁殖の様子が絶妙なシャッターチャンスで撮影されています。

―― 下村の作品は国際的にも評価されたと聞いています。

平岡　はい。ここまでに紹介した《ナベヅルの降下飛翔》《ツツドリの雛に給餌するセンダイムシクイ》《巣

《巣穴に飛び込むルリカケス》
1935 年 4 月 20 日 鹿児島県奄美大島

《トラツグミ》（右上）
1929 年 6 月（推定）富士山麓須走

《舞い上がるサカツラガン》のトリミングについて解説する平岡氏

穴に飛び込むルリカケス》それから《トラツグミ》の作品は、1935 年に大英博物館で開催された万国自然写真展覧会に出品されています。日本からは 9 人の写真家、50 点の作品が出品されたのですが、下村の作品はそのうちの 27 点を占めていました。

―― 飛び抜けて優れていたのですね。

平岡　そうですね。この 4 点は、出品作品の中から選ばれた傑作だけが収録されている『NATURE IN THE WILD』という写真集にも掲載されました。日本人では下村だけが選出されたのです。当時、国際的にも十分評価に値する写真だと認められたのです。

―― 素晴らしい功績ですね。その後の 1940 年代の代表作《舞い上がるサカツラガン》について教えてください。

平岡　これは東京湾、千葉県新浜で撮られたものです。サカツラガンはユーラシア大陸の東側だけに分布するガン類です。戦前のこの頃までは、東京湾にもサカツラガンが中国から飛来していたんですが、現在では日本に定期的に渡来する場所はなくなっており、そういう点でも貴重な写真です。

―― 構図が面白いですね。

平岡　下村がちょっと冒険したといいますか、実際にはこのように急上昇することはないのですが、躍動感を出そうと思ったのか、下村なりの伝えたいことがあり、このように画面を大きく回転させた、大胆なトリミングをしたのかなと思います。

―― なるほど。それから、今回は下村の描いた鳥の絵も展示しています。

平岡　日本初のフィールドガイドと言われる『観察手引原色野鳥図』（三省堂、上巻・1935 年、下巻・1937 年）の原画ですね。下村は写真だけでなく、自分で絵も描きました。それから、写真でも、鳥以外の生き物も撮っていたし、こういった馬や豚など、家畜を撮ったものなどもありますね。

―― 下村の人柄が伝わってくるような、温かみのある写真ですね。

平岡　下村は農林省に在籍していたこともあり、鳥以外の写真というのは、そういった関係で撮影したものもあるかもしれません。

―― これからの研究で、もっといろいろなことがわかってきそうですね。

聞き手：大澤友貴（フォトクラシック）

＊インタビューは特別編に続きます。8 月 20 日（木）掲載予定です。

原画（上／横に 5 点並んでいる作品）と鳥以外の生き物の写真（左）

●ゲストプロフィール

平岡 考（ひらおか・たかし）
山階鳥類研究所自然誌研究室専門員・広報コミュニケーションディレクター。
標本管理を長く担当した後、2005–2008 年、下村兼史の写真資料に関する整理保存作業、調査研究に携わる。2018 年、「－下村兼史 生誕 115 周年－ 100 年前にカワセミを撮った男・写真展」（主催：山階鳥類研究所）実行委員。現在、広報担当者として広報紙「山階鳥研ニュース」やウェブサイトでの発信などを担当。

フジフイルム スクエア 写真歴史博物館 企画写真展
関連プログラム

100 年前にカワセミを撮った男・下村兼史 －日本最初の野鳥生態写真家－

インタビューシリーズ・第 1 弾
「下村兼史の人と作品を語る」（後編）
ゲスト：平岡 考 氏（公益財団法人 山階鳥類研究所・広報コミュニケーションディレクター）

展覧会
会場：フジフイルム スクエア 写真歴史博物館
会期：2020 年 7 月 1 日（水）– 9 月 30 日（水）

主催：富士フイルム株式会社
特別協力：公益財団法人 山階鳥類研究所
協力：公益財団法人 日本野鳥の会、有限会社バード・フォト・アーカイブス
監修：公益財団法人 山階鳥類研究所
後援：港区教育委員会
企画：フォトクラシック

記事
公開日：2020 年 8 月 13 日
発行：富士フイルム株式会社　宣伝部
編集：フォトクラシック
デザイン：脇野直人

© 富士フイルム株式会社　禁無断転載